

ベルギーの大学生による 日本の短編映画の字幕制作プロジェクト

小熊 利江（ゲント大学）
rie.oguma@ugent.be

【要約】

本稿は、ベルギーの大学の日本学専攻における日本映画の字幕制作プロジェクトの実践について報告する。大学のカリキュラムにおける本プロジェクト型学習の位置づけ、内容や活動の手順を記述し、学生へのアンケート調査の結果から学習効果を分析した。その結果、学生は台詞の意味や発話意図、言葉の自然さ、文化的要素、文脈、スピーチスタイル、字数制限などを意識しながら字幕翻訳を行ったことが明らかになった。また、現実社会とつながる活動を通して学生が学習意欲を高め、自己効力感を得たこともわかった。

1. はじめに

ベルギーのある大学の日本学専攻では、2016年以來ほぼ毎年、日本語学習のカリキュラムの一環として、日本の短編映画に英語¹の字幕を付けるプロジェクトを取り入れている。学生が翻訳した字幕を付けた映画は、その年の5月末頃に開催されるドイツの日本映画祭で実際に上演される。2021年から現在までの5年間は、筆者が教員として本プロジェクトの運営を担当している。

本プロジェクト型学習を導入し、毎年運営する教員側からは、教室内の言語学習と現実社会をつなげる実践的な課題を通して、学生が普段より真剣に学習に取り組み、日本映画の分析によって日本語や日本文化を習得することが期待されている。毎年の学期末には、多くの学生が本プロジェクトは楽しかった、勉強になったなどと述べるほど、とても評判のいい活動である。しかしながら、実際にどのような学習が起こっているのか、その学習効果は具体的に検討されてこなかった。映画の字幕制作は他機関においても行われている言語学習活動であると思われるが、本分野に関する先行研究は管見の及ぶ限り見られない。

そのため、2025年のプロジェクト終了後、学生に対してアンケート調査を行うことにした。本稿では、海外における日本映画の字幕制作プロジェクトの内容と実施手順を紹介し、さらに言語学習における映像翻訳の意義や、言語習得におけるプロジェクト型学習の効果を検討する。

2. プロジェクト型学習としての字幕制作

プロジェクト型学習（Project-based Learning、以下 PBL とする）は、学習者が現実社会の課題に取り組み、成果物を作り上げる過程で知識や技能を習得する学習方法である。アメリカの哲学・教育学者

¹ドイツの日本映画祭に出品し世界へ発信するために、英語の字幕を付ける活動となった。多くの学生の母語はオランダ語であるが、全員高度の英語能力を持っている。

デューイの思想をもとにしてキルパトリックが体系化した「プロジェクト・メソッド」(1918)を起源としている。プロジェクト・メソッドでは思考を働かせ学習を行う際に、社会的な文脈のなかで明確な目的を設定する重要性を主張している。外国語教育の現場では、以前から学習者中心のアクティブな学習方法が模索され実践されており、日本語教育においても学習者が主体的に課題に取り組む PBL がますます注目されている。

Beckett & Slater (2005) は PBL に関する言語教育研究を概観し、PBL が言語、知識、思考力を同時に習得することができる学習方法であると述べている。Slater & Beckett (2019) は、PBL が現実世界という文脈で生の言語を習得する機会を提供し、学習者は知識の他に意思決定や課題解決などの能力も身に付けることができると述べている。また、学習者が実際の社会的文脈の中で長期のプロジェクトに取り組むことが、言語能力の向上の他、学習意欲や自律性の向上を促進し、協働や批判的思考、デジタルリテラシーのような 21 世紀型スキルも発達させると指摘されている (Dawson 2023, Ferecbeyli 2025)。

本学における日本映画の字幕制作プロジェクトは、明確な目的が設定されている、社会的文脈の中で長期のプロジェクトに取り組む、学習者中心のアクティブな学習である、成果物を生成する、などの点で PBL に特徴的な要素を多く含む学習活動であると言える。

3. 言語学習における映像翻訳

翻訳学は言語学習において、古くからの学問領域である。かつては書物を翻訳することが言語学習の目的であったこともあるが、現代の言語学習ではコミュニケーション能力の習得がより重視されている。生成 AI が発達して容易に多言語間の翻訳が可能となった現代で、なぜ昔の学習方法と考えられがちな翻訳を日本語学習に取り入れるのか。

一定の長さと内容を持つ作品の翻訳においては、単語レベルや文レベルではなく作品全体の雰囲気を理解し、話の大筋を取って流れをつかむことが求められる。一方で、原文を細かく再現しなければ、作品の特徴やメッセージが失われる。翻訳の際には、作者の意図を忠実に反映することが重要である。また、翻訳は通訳のように即座に発話を行う必要がなく、長い時間をかけて表現や内容を推敲することができる。したがって、時間的な制約の少ない状況で、最適な表現を選ぶ過程において言語自体を深く考えることになる。このように作品の翻訳は、全体から細部にわたり様々な視点からの理解を要求する言語活動だと言える。

本プロジェクトは映像翻訳という分野のため、言語の他にも豊富な視覚情報および聴覚情報が同時にもたらされる。話者の音声の変化、表情やジェスチャー、場面や発話状況などの視覚・聴覚情報も考慮しつつ、そこで使用された言語を理解することは、社会言語学的な日本語能力を促進すると考えられる。さらに、字幕翻訳には字数の制限があり、映画の台詞から解釈された内容をわかりやすく端的に表現することが求められ、そのためには発話の真に重要な内容、話者の意図を確実に捉える必要がある。このように、大学の日本学専攻というアカデミックな言語学習において、映像翻訳活動は言語表現を深く学び訓練する場を提供できると言える。

4. 実践の概要

4.1 海外大学字幕プロジェクト

本プロジェクトは、日本の映像翻訳会社の企画する海外大学字幕プロジェクトを有償で利用してい

る。字幕翻訳を行う対象の映画は、映像翻訳会社によって提供される。毎年 9 月に日本国内で開催される映画祭「ぴあフィルム・フェスティバル」の短編映画コンペティション部門²で優秀賞に選ばれた作品の中から、映像翻訳会社がいくつかリストアップし、それらを教員が視聴して 1 つの作品を採用する。

その日本の短編映画に学生の制作した翻訳を付けた完成作品は、映像翻訳会社を通して翌年のドイツの日本映画祭に提供され、そこで実際に上映されることから、本プロジェクトは日本とドイツの映画祭の橋渡しの機能を持っている。本プロジェクトの成果物によって、日本の映像文化を世界に発信することになるため日本社会にとっても有意義であり、ぴあフィルム・フェスティバルやドイツの日本映画祭にとっても話題作りとなる。さらに、学生にとって映画は日本語学習の教材となり、プロフェッショナルな映像翻訳者から字幕翻訳に関する指導やフィードバックを受けることができる上、ドイツの日本映画祭主催者から 2 人の学生が映画祭に招待されるという利点もある。このように多くの方面にとって、ウィンウィンのプロジェクトなのである。

4.2 日本学専攻における本プロジェクトの位置づけ

プロジェクトは、本学の日本学専攻の必修科目である「現代日本語」科目のカリキュラムのなかで実施されている。日本映画の字幕翻訳を制作するために、大学の後期（2 月～5 月）の授業のうち約 5 週間が充てられる。詳しい実施状況は、以下の通りである。

対象学生： 日本学専攻の修士課程 1 年生と学部 3 年生³

日本語能力： CEFR の B2 レベル

参加人数： 約 15～30 人（年によって異なる）

授業時間： 毎週月曜日、90 分授業を 2 コマ連続で用いる

4.3 プロジェクトの作業手順

プロジェクトの具体的な進め方について、2025 年を例にして説明する。2025 年には 3 月の約 5 週間で字幕翻訳の制作活動に充てた。参加した学生数は、修士課程 1 年生 12 人と学部 3 年生 4 人の合計 16 人であった。対象となる映画は 30 分程の長さだったため、学生は 6 つのグループに分かれて、それぞれ約 5 分間の映像を分担して翻訳した。

授業の 1 回目に教室で教員の指導の下、プロジェクトが開始された。2 回目から 5 回目の授業も教室で行われたが、前半の 90 分を日本の映像翻訳会社とのオンライン・セッションに使用し、後半の 90 分をグループでの翻訳活動とした。映像翻訳会社によるオンライン・セッションは、全て英語で行われる。後半の 90 分は映像翻訳会社から送られてきた日本語の SCRIPT（台詞など）を見ながら、各グループが担当部分の翻訳を行い、オンライン上で共有されたエクセルシートに記入する。担当部分が終了しないグループは次週までの宿題となる。各グループは、毎週月曜日のオンライン・セッションで映像翻訳会社からのフィードバックを受けながら翻訳を進める。字幕翻訳が完成すると、映像翻訳会社が学生の字幕を映画に付けて送ってくるので、学生全員で視聴し、字幕の見え方や読みやすさなどを最終点検する。点検が済んだ後、完成作品を提出する。

² 当該部門への 2025 年の応募数は 795 本、2024 年の応募数は 692 本であった。

³ 本学の日本学専攻のカリキュラムでは、学部 3 年次の後期に日本へ留学することになっているが、諸事情により留学しなかった学生が字幕制作プロジェクトに参加している。

具体的な活動スケジュールは、以下の通りである。

[授業 1 回目] 映画視聴、内容理解を促進する活動、意見交換

[授業 2 回目] オンライン・セッション① (映像翻訳に関する基礎知識、字幕制作のルールや注意点、映画の理解確認)、グループ翻訳活動

[授業 3 回目] オンライン・セッション② (映画のテーマ・世界観・構成等の分析、学生からの質問、学生の翻訳へのフィードバック)、グループ翻訳活動

[授業 4 回目] オンライン・セッション③ (映画のシーンごとに詳しく翻訳確認、グループ間の翻訳の一貫性や継続性の確認、学生からの質問、学生の翻訳へのフィードバック)、グループ翻訳活動

[授業 5 回目] オンライン・セッション④ (映画監督や俳優との交流、質問や意見交換)、グループ翻訳活動、最終点検

4. 4 指導における工夫

プロジェクトを通して教員が行うことは、日本の映像翻訳会社とのやりとり、事前の作品選び、授業 1 回目の内容理解を促進する活動の準備と実施、字幕完成までの間に日本語の台詞の理解を学生に確認することなどである。作品選びの際には、なるべく台詞の多いもの、日本の習慣や文化的理解を必要とするもの、大学生にとって興味や共感が持てそうなもの、などの点に留意している。授業 2 回目以降、実際に翻訳活動が始まってからは、教員が主導して何かを行うことは少なく、学生が主体的に課題に取り組むようなデザインとなっている。

授業 1 回目に教員の実施する内容理解の促進活動は、学生への質問と意見交換からなる。まず始めにスクリプトを見ずに映画の視聴を行い、学生が中心的な内容を正しく理解したかどうか問う正誤問題をクイズ形式にして出題する。次に、映画の中に答えを見つけられるようなオープン型の質問を行い、作品の理解を深める。その後、再び映画を視聴する。2 回目の映画の視聴後に理解確認のための質問を行い、最後に映画内には答えが明示されていないようなテーマをいくつか提示して、学生をディスカッションへと導く。ディスカッションをすることで、学生同士の対話が起これ、互いの意見を聞いて自分の考えを修正したり、発言することで自らの意見を磨き上げたりすることにつながる。映画の解釈には常に正解があるわけではなく、また正解が 1 つとは限らないため、対話を通して様々な意見が提示され、議論され、理解が深まることが期待される。

5. アンケート調査の結果と考察

2025 年にはプロジェクトの終了後に、学生にアンケート調査を行った。アンケートの形式はオンラインの質問紙によるもので、回答方法は多肢選択や自由記述⁴である。記名式であるが、回答自体を任意とし、回答内容は成績と関係しないことを強く確認した。その結果、参加した学生 16 人のうち 12 人 (修士 1 年生 9 人と学部 3 年生 3 人) が回答し、有効回答率は 75%であった。本稿では、その一部を紹介し、分析を行う。

⁴ 自由記述において英語で記された内容は、筆者が日本語に翻訳して記した。

5.1 学生が字幕制作において留意したこと

まず、字幕制作において、学生がどんなことに気がつけたかについて質問を行った。その結果、以下のように様々な意見が挙げられた。それらは次の6つの分野、(1) 意味・意図、(2) 言葉の自然さ、(3) 文化的要素、(4) 文脈、(5) スピーチスタイル、(6) 字数制限、に分類できることがわかった。これら6つの分野は、映画の字幕翻訳という言語学習活動において特徴的な学びの領域ではないかと考えられる。

以下に、学生の意見を記す。それぞれの分野に該当する部分に下線を引き、分野の番号を付した。

- ・日本語の (1) 意味を保つこと
- ・ (5) カジュアルな言葉 や (1) ニュアンス
- ・字幕は (6) あまり長くできず、英語で (2) 自然に聞こえる 必要があり、(1) 正しい意味が伝わる ように
- ・なるべく原文に近く、(2) 流暢な感じ で訳せるように
- ・最も気を付けたのは、(3) 文化的意義 を失うことなく、(2) 自然であること
- ・(3) 特定の文化的な物事や特別な状況を伝えること
- ・(4) 文脈 に注意を払った
- ・英語の (4) 文脈 でも理解可能かどうか
- ・(6) 文字制限 に注意。(4) 文脈の中で論理的 であること
- ・(5) 場面、状況、誰が話しているか
- ・(5) 若者が話しているように

以上の回答から、学生は様々な方面に意識を向けながら翻訳を行っていたことが明らかになった。特に、文化的要素や文脈、スピーチスタイルといった分野を同時に意識している様子から、学生は文字通りの意味だけでなく、発話の相手や状況を考慮した社会言語学的な意味の理解に留意したことが伺える。

これは、多様な方面に注意を向けながら発話する実際の言語使用と同じような状況であると考えられる。しかし、即座に反応しなければいけない実際の会話場面とは異なり、映像翻訳では学生は時間をかけて言葉の意味や発話の意図を深く理解することに集中できる。このように表現と意味や意図との関係を深く考える本活動は、学生が実際に会話を行う状況になった際に役立つのではないだろうか。このことは、映像翻訳の活動を言語学習に導入する意義の一つであると考えられる。

5.2 学生によるプロジェクトの評価

教育の効果は、短期的に定量的に測定することが難しいと言われている。ここでは、本プロジェクト型学習の効果について、学生自身がどう認識しているかという観点から分析を行う。

プロジェクトの評価を測るための間接的な質問として、来年の学生にも字幕プロジェクトがあった方がいいと思うかという質問をした。その結果、「あった方がいい」という回答が10人、「ない方がいい」が1人、「どちらでもない」が1人という結果であった。「あった方がいい」と答えた学生は、本プロジェクトの学習効果を高く評価しているということができる。その理由として、次のような意見が挙げられた。

- ・他の授業と違うのでいい
- ・いろいろなことを教われる
- ・話し言葉やインフォーマルな言葉の勉強・練習
- ・日本語能力を実践的に使える面白い企画
- ・プロと一緒に働くことで、日本語を学ぶことに対して良い気持ちになった
- ・実際のプロジェクトに参加できる

これらは、普段の授業と異なる新しい活動への興味や、台詞に使用されている色々な語彙や表現、スピーチスタイルを学べるという利点、自身が習得した日本語能力の可用性の確認や自己効力感、社会参加することの有意義性や楽しさなどが表れていると考えられる。本プロジェクトは、PBL として社会的文脈の中でのアクティブな学習を通して、言語知識の学習の他、学習意欲が向上し、また自己効力感を得られるなど情意面での効果にもつながったとすることができる。

一方、「ない方がいい」と答えたのは1人の3年生であったが、その理由は、修士でも行うなら3年生でなくてもいいと記されていた。つまり、同じ活動を2年連続で行うことに否定的なのであり、活動内容に対して否定的な意見ではなかった。

6. おわりに

本実践研究では、ベルギーの大学の日本学専攻における日本映画の字幕制作プロジェクトについて報告した。PBL として社会的文脈の中でのアクティブな学習活動を通して、本プロジェクトは教室内の言語学習と現実社会をつなげることができたとと言える。

本稿では、PBL としての実践の内容と手順を具体的に記述し、字幕制作プロジェクトに対する学習者側の認識と評価を、アンケート調査を用いて明らかにした。その結果、本プロジェクトは学生にとって、普段の授業と異なる新しい活動であり、興味を持って取り組めたことがわかった。映像翻訳を通して、台詞に用いられた様々な日本語の語彙や表現の理解とともに、映画に含まれる音声情報、画像情報、文化情報を用いて社会言語学的な理解も得られたのではないかと考えられる。また学生が、台詞の意味や発話意図、言葉の自然さ、文化的要素、文脈、スピーチスタイルなど多方面に同時に意識を向けながら字幕翻訳を制作したことも明らかになった。実際の言語使用も同じように多方面に意識を向けなければいけない状況であるため、字幕翻訳活動は実際の会話場面にも役立つと考えられる。さらに、学生が字幕翻訳において留意した分野を(1)意味・意図、(2)言葉の自然さ、(3)文化的要素、(4)文脈、(5)スピーチスタイル、(6)字数制限の6つに分類することができた。これら6つの分野は、映画の字幕制作という言語学習活動における学びの特徴ではないかと考えられる。

映画の字幕翻訳という実践的な課題を通して、言語知識の学習の他、学生の学習意欲が向上し、また自己効力感を得られるなど情意面での効果にもつながった様子が見られた。本プロジェクトを通して、学生は自身の日本語能力が実社会で通用することを確認し、社会参加の楽しさなどを感じたことも明らかになった。

参考文献

- (1) Beckett, Gulbahar H. & Tammy Slater (2005) The project Framework: a tool for language, content, and skills integration. *ELT Journal*, 59(2), 108-116. Oxford University Press.
- (2) Dawson, Luan Antoni (2023) Enhancing language development through project-based learning: a literature review. *Canadian Journal of Language and Literature Studies*, 3(6), 35-40.
- (3) Ferecbeyli, Nermin (2025) Project-based learning in language teaching. *Euro-Global Journal of Linguistics and Language Education*, 2(5). 107-118.
- (4) Kilpatrick, William Heard (1918) The Project Method: The Use of the Purposeful Act in the Educative Process. *Teacher College Record*, 19, 319-335. Columbia University
- (5) Slater, Tammy & Gulbahar Beckett (2019) Integrating language, content, technology, and skills development through project-based language learning: blending frameworks for successful unit planning. *MEXTESOL Journal*, 43(1), 1-14.